

大阪インターナショナルチャーチ： ブルース・アレン牧師
詩篇 98 篇 4 節, ルカの福音書 1 章 26 節-35 節,
マタイの福音書 1 章 18 節-25 節、ヨハネの福音書 1 章 4 節-13 節
新アメリカ標準訳聖書 (NASB1995) 、注記がある箇所を除く

2025/12/24

メッセージ：イエス様は来られました。讃美の歌と信仰をもってお迎えしましょう

みなさん、こんばんは。メリークリスマス

このメッセージで、人々への神様の愛を明らかにしている、また、イエス様の誕生日を祝うことが神様にどれほど喜ばれるかの聖書の御言葉をいくつか分かち合います。さらに、毎年のクリスマスの時期に、神様がどのように人々をイエス様への信仰へと導き、引き寄せておられるのかについても語ります。また、神様は、イエス様を受け入れるための心の備えをなさるために人生における苦しみや試練を用いておられることについても語ります。

イエス様の誕生は喜びに満ちた讃美と歌を生み出します

私たちは皆、家族や友人の誕生日を祝うことが喜びです。神様がイエス様においてこの地上に来られたときの特別なお祝いが次の聖書箇所に描かれています。

＜詩篇 98 編 4 節＞

だからこそ、大地は大声を上げてほめたたえ、 感きわまって歌うのです。

私たちのクリスマス讃美歌「喜びの歌を、世に告げよ (Joy to the World! The Lord Is Come)」は、このクリスマスの季節に私たちが祝っている、イエス様の誕生の精神を見事に捉えています。

神様はクリスマスにおいて聖徒も罪人も多くの人々を特別に感じさせてくださいます

私がここで用いている「聖徒 (saint)」という言葉は、キリスト教聖書における意味で、「クリスチャン」、すなわち「聖なる者」を指します。讃美歌「Joy to the World (喜びの歌を、世に告げよ)」の第 1 節には、「喜びを世界に。主は来られた。地はその王を迎へよ。」と歌われています。

このクリスマスの季節には、喜びを生み出す楽しいことがたくさんあります。色とりどりに飾られた明るいイルミネーションやクリスマツリー、そしてツリーの下に置かれた贈り物は、私たちの心を明るくし、幸せな気持ちしてくれます。これらは、私たちに喜びをもたらす楽しいものです。

医師たちは、人々のうつ状態が光、特に強い光によって改善されると言っています。人類は、医師による研究がなされる以前から、そのことを知っていました。雲が多く降雨量の多い地域では、医学的に見たうつ症状がより多く見られ、さらには人口も少なくなる傾向があります。アメリカ合衆国ワシントン州のシアトル市や、米国アラスカ州の西方に位置するアリューシャン列島の島々は、その一例です。アリューシャン列島のある島では、わずか数年のうちに人口が 500 人から 15 人にまで減少しました。住民たちは、近隣の本土の都市の方が、新たな雇用や住居を提供してくれることを学びました。

アリューシャン列島一帯を覆う広範な雲は、温かい太平洋の海水と暖気が、北極海からの冷たい空気と接近・衝突することによって形成されます。この自然現象が、気分を沈ませやすい気象環境を生み出しているのです。

したがって、クリスマスの明るさは、私たちすべての心にある悲しみや心の落ち込みを和らげる助けとなるはずです。しかし、讃美歌「Joy to the World (喜びの歌を、世に告げよ)」が見つめているのは、医学や人口学、あるいは地理的な歴史から学んだ自然現象よりも、さらに深い次元のものです。この讃美歌は、主イエス様が地上に来られたゆえに、世界全体、すなわち全地が喜びに満たされるべきであると告げています。

詩篇 98 篇は、今からほぼ 3,000 年前に書かれたものです。この詩篇は、地上のすべての住民が、神様の来臨に備えて心を開き、「喜びの叫び」を上げ、「歓喜の歌」を高らかに歌い、「音楽を奏でる」べきであると宣言しています。

この讃美は、神様の救いのみわざが全地に益をもたらすという期待に応えるものであり、それゆえ、すべての人が喜ぶべきであると語っています。それはイスラエルの民に預言的に語られたものでしたが、その意味は全人類が理解すべきものです。イスラエルは、預言者たちから、彼らの救い主であるメシアが来られると告げられていました。

この詩篇は、救い主、すなわちメシアが主ご自身であり、全地、すべての民族に属するお方であることを明らかにしています。この方こそ、全世界の救い主です。その御名は、イエス様です。

主イエス様を最初に迎えた人々 マリアとヨセフ

朗読箇所：<ルカの福音書 1 章 26 節 - 35 節>

26 その翌月、神は天使ガブリエルを、ガリラヤのナザレという町に住むマリヤという処女のところへお遣わしになりました。

27 この娘は、ダビデ王の子孫にあたるヨセフという人の婚約者でした。

28 ガブリエルはマリヤに声をかけました。「おめでとう、恵まれた女よ。主が共におられます。」

29 これを聞いたマリヤは、すっかり戸惑い、このあいさつは、いったいどういう意味なのかと考え込んでしまいました。

30 すると、天使が言いました。「こわがらなくともいいのです、マリヤ。神様があなたにすばらしいことをしてくださるのです。

31 あなたはみごもって、男の子を産みます。その子を『イエス』と名づけなさい。

32 彼は非常に偉大な人になり、神の子と呼ばれます。神である主は、その子に先祖ダビデの王座をお与えになります。

33 彼は永遠にイスラエルを治め、その国はいつまでも続くのです。」

34 マリヤは尋ねました。「どうして私に子どもができましょう。まだ結婚もしておりますんに。」

35 「聖霊があなたに下り、神の力があなたをおおうのです。ですから、生まれてくる子どもは聖なる者、神の子と呼ばれます。」

朗読箇所：<マタイの福音書 1 章 18 節 - 25 節>

18 イエス・キリストの誕生は次のとおりです。母マリヤはヨセフと婚約していました。ところが結婚する前に、聖霊によってみごもったのです。

19 婚約者のヨセフは、神の教えを堅く守る人でしたから、婚約を破棄しようと決心しました。しかし、人前にマリヤの恥をさらしたくなかったので、ひそかに縁を切ることにしました。

20 ヨセフがこのことで悩んでいた時、天使が夢に現れて言いました。「ダビデの子孫ヨセフよ。ためらわないで、マリヤと結婚しなさい。マリヤは聖靈によってみごもったのです。

21 彼女は男の子を産みます。その子をイエス（「主は救い」の意）と名づけなさい。この方こそ、ご自分を信じる人々を罪から救ってくださるからです。

22 このことはみな、神が預言者（神に託されたことばを語る人）を通して語られた、次のことばが実現するためです。

23 『見よ。処女がみごもって、男の子を産む。その子はインマヌエル〔神が私たちと共におられる〕と呼ばれる。』（イザヤ7・14）

24 目が覚めるとヨセフは、天使の命じたとおり、マリヤと結婚しました。

25 しかし、その子が生まれるまでは、マリヤに触れませんでした。そして、生まれた子をイエスと名づけました。」

＜ルカの福音書1章28節＞において、御使いガブリエルはマリアに現れ、次のように告げました。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられます。」

また、＜マタイの福音書1章20節＞では、御使いがヨセフに向かって、「ダビデの子ヨセフ」と呼びかけています。

このようにして、マリアとヨセフの2人は、この奇跡の子が訪れた2人の御使いによって神様から約束された存在であることを知りました。彼らは、これまで誰も経験したことのないほどの神様の特別な恵みを受けていました。

処女マリアからイエス様が誕生されたとき、マリアもヨセフも、神様への讃美に満ちた心で幼子イエス様を見つめていたに違いありません。＜ルカの福音書2章19節＞は、マリアの内なる思いを次のように伝えています。

＜ルカの福音書2章19節＞

マリヤはこれらのことすべて心に納めて思い巡らしていました。

羊飼いたち

朗読箇所：＜ルカの福音書2章8節 - 20節＞

8 その夜、町はずれの野原では、羊飼いが数人、羊の番をしていました。

9 そこへ突然、天使が現れ、主の栄光があたり一面をさっと照らしたのです。これを見た羊飼いたちは恐ろしさのあまり震え上りました。

10 天使は言いました。「こわがることはありません。これまで聞いたこともない、すばらしい出来事を知らせてあげましょう。すべての人への喜びの知らせです。」

11 今夜、ダビデの町（ベツレヘム）で救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

12 布にくるまれ、飼葉おけに寝かされている幼子、それが目じるしです。」

13 するとたちまち、さらに大ぜいの天使たちが現れ、神をほめたたえました。

14 「天では、神に栄光があるように。地上では、平和が、神に喜ばれる人々にあるように。」

15 天使の大軍が天に帰ると、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださった、すばらしい出来事を見てこようではないか」と、互いに言い合いました。

16 羊飼いたちは息せき切って町まで駆けて行き、ようやくヨセフとマリヤとを捜しあてました。飼葉おけには幼子が寝ていました。

17 何もかも天使の言ったとおりです。羊飼いたちはこのことをほかの人に話して聞かせました。

18 それを聞いた人たちはみなひどく驚きましたが、

19 マリヤはこれらのことすべて心に納めて思い巡らしていました。

20 羊飼いたちは、天使が語ったとおり幼子に会えたので、神を賛美しながら帰って行きました。

天においてイエス様を知っていた御使いたち、身分の低い羊飼いたち、そしてヨセフとマリアに詩篇 98 篇すべてが成就しました。

「喜びを世界に。主は来られた。」

彼らは、全世界の救い主の到来を喜び、神様を讃美しました。羊飼いたちは、イエス様の誕生という良き知らせを人々に伝え広めました。羊飼いたちは、御使いたちを見たことのゆえにも神様を讃美しましたが、それ以上に、主ご自身を見ることができたことに神様をほめたたえたのです。いと高き所におられる神様は、ヨセフとマリア、そしてこれらの羊飼いたちを喜ばれました。

幼子イエス様は地上から讃美をもって迎えられたのでしょうか

ここで、皆さんは次のように尋ねられるかもしれません。

「イエス様の誕生に際して、地上もまた神様を讃美したのでしょうか。」

実際のところ、ヨセフとマリア、そして羊飼いたちを除けば、必ずしもそうではありませんでした。当時、イエス様の存在を知っていた地上、すなわち世界の 1 部は、イスラエルだけでした。

イスラエルの王ヘロデがイエス様を殺そうと企てた詳細についてはここでは触れませんが、使徒ヨハネは、イエス様がどのように迎えられたのかを、次の聖書箇所において要約しています。

＜ヨハネの福音書 1 章 4 節 - 13 節＞

4 キリストには永遠のいのちがあります。全人類に光を与えるいのちです。

5 そのいのちは暗闇の中でさんぜんと輝いていて、どんな暗闇もこの光を消すことはできません。

6・7 イエス・キリストこそほんとうの光です。このことを証言させるために、神はバプテスマのヨハネをお遣わしになりました。

8 ヨハネ自身は光ではなく、ただその光を指し示す証人にすぎません。

9 後に、ほんとうの光である方が来て、全世界の人々を照らしてくださったのです。

10 ところが、世界を造った方が来られたというのに、だれもこの方に気づきませんでした。

11・12 ご自分の国に来ながら、ご自分の民に受け入れられなかつたのです。この方を心から喜び迎えたのは、ほんのわずかな人たちだけでしたが、受け入れた人はみな、この方から神の子どもとなる特権をいただきました。それにはただ、この方が救ってくださると信じればよかったです。

13 信じる人はだれでも、新しく生まれ変わります。それは、人間の熱意や計画によるものではありません。神がそう望まれたからです。

このように、私たちが毎年 12 月 25 日に祝うイエス様の誕生は、数千年にわたる歴史の流れの中に位置づけられる出来事として捉えることができます。実際には、神様は天地創造の以前から、救い主としてイエス様を幼子として遣わすご計画を立てておられました。

しかし、今日この地上に生きる人々は、非常に 2000 年前の人々のようです。多くの人は、この小さな幼子を「受肉された（人の身体をとられた）神様」として受け入れることを拒んでいます。しかし、この方こそ、まさにそのお方なのです。

多くの人は「信じている」と口では言いますが、実際にはひざをかがめて主として告白しようとはしません。確かに、多くの人々は幼子イエス様を受け入れますが、それは「愛らしい赤子」としてであり、誕生から約 35 年後に、人類の罪のためにご自身をささげてくださった、その犠牲的な死の意味を信じようとはしないのです。

人類の罪に対する神様のさばきからの救い主

この小さな幼子は成長し、神様の御子として、人類に神様ご自身を現されました。

使徒パウロは、イスラエルの道を進んでいる途中で、復活された主イエス様に出会いました。その当時、パウロはクリスチャンたちを迫害し、捕らえて投獄し、拷問し、さらには1人のクリスチャンが石打ちにされて殺されることさえ支持していました。

しかし、主イエス様に出会い、主が彼に語りかけられたとき、パウロは、イエス様こそ神様の御子であり、主であることを悟ったのです。それから数年後、彼はコリントの教会に宛てて手紙を書き、神様が人類に赦しと和解を与えるために、イエス様が何を成し遂げられたのかを改めて伝えました。その言葉は、次の聖書箇所に記されています。

＜コリント人への手紙 I 15章3節 - 4節＞

3 まず私は最も大切なこととして、かつて自分も知らされた、次のことを伝えました。すなわち、キリストは、聖書に記されているとおり、私たちの罪のために死なれ、
4 葬られたこと、そして預言者たちの語ったとおりに、三日目に復活されたことです。

聖書に記されている神様の人、パウロは、自分が受け取ったものの中で、最も重要なこととして、これらのクリスチャンたちに伝え、宣べ伝えたと語っています。これは、彼がそれを受け取ったとき、それほどまでに重大な内容であったため、クリスチャンを殺す側にいた者から、イエス・キリストを宣べ伝える者へと、彼の人生そのものを変えてしまったことを意味しています。何と重要なことでしょうか。

そしてイエス様ご自身も、＜ルカの福音書 9章25節＞で語っておられました。

＜ルカの福音書 9章25節＞

人はたとえ全世界を手に入れても、自分自身を失ってしまったら何にもなりません。

これ以上に大切なことは何もありません。

幼子イエス様は成長され、聖書に記されているとおり、私たちの罪のために死なれました。聖書の旧約には、人類のために苦しみを受ける「苦難の僕」が来られることが預言されており、またその方が葬られることも語られていました。つまり、イエス様は他のすべての人と同じように、本当に死に、墓に葬られたのです。

しかし、これまで誰も成し得なかつたこととして、イエス様は3日目によみがえられました。これもまた聖書に記されているとおりです。

旧約聖書（ここで言う「聖書」）は、死に打ち勝ち、永遠に全地万物の王として治められる救い主について語っています。イエス様こそが、その全地万物の王であり、かつてそうであつただけでなく、今もなおそうなのです。イエス様は今日も生きておられます。

それゆえ、神様はご自分の御子を墓の中からよみがえらせ、その力をもって、イエス様が十字架で死なれたことが、全世界のすべての時代にわたる罪を取り除くために、神様に受け入れられたものであったことを示されました。

赦しを受けるための唯一の条件、あるいは必要なことは、使徒パウロの場合と同じであり、どのような罪人に対しても変わりません。パウロのようにイエス様を目で見る必要はありませんが、イエス様がご自身で語られたとおり、神様の御子であることを信じることが必要です。

そして、幼子のような純粋な信仰をもって、イエス様があなたのために、あなたの罪のために死なれたことを信じなければなりません。

心の底から信じるとき、あなたはイエス様を受け入れたことになります。そのとき、あなたはキリスト者（クリスチャン）となるのです。

そして神様が約束されたとおり、＜ヨハネの福音書1章12節－13節＞に記載されているように、あなたには神様の子どもとなる権利が与えられます。

＜ヨハネの福音書1章12節－13節＞

11・12 ご自分の国に来ながら、ご自分の民に受け入れられなかつたのです。この方を心から喜び迎えたのは、ほんのわずかな人たちだけでしたが、受け入れた人はみな、この方から神の子どもとなる特権をいただきました。それにはただ、この方が救ってくださると信じればよかつたのです。

13 信じる人はだれでも、新しく生まれ変わります。それは、人間の熱意や計画によるものではありません。神がそう望まれたからです。

イエス様を「主」または「主人」と呼ぶことについて

アメリカでは、「主（lord）」という言葉は、ほとんどクリスチャンの間でしか用いられません。そのため、アメリカでは「イエス様は神様であり、私の主人（支配者）である」と言ったほうが分かりやすい場合もあるでしょう。

しかし、日本やイギリスでは、この「主」という言葉は、歴史の中で深く根づいています。両国において、何世紀も前の封建制度の中で一般的に用いられるようになった言葉です。

イギリスでは、神様から与えられたと考えられていた王の統治は「農奴（serfs）」を支配する「領主（lords）」を通して行われていました。

今日のイギリス、また日本語においても、この言葉は神的な権威というよりは、社会的な権威を持っています。

実際のところ、私は日本語の「主」という言葉のほうが、より現代にも通じるものだと考えています。その歴史は今なお生きており、靈的な意味においては、世界全体に当てはめられるかもしれないのです。

19世紀半ば、將軍が治める体制のもとにあった「大名（lords）」たちは、新たに即位した明治天皇によってその権力を失いました。明治天皇は、より強大な西洋諸国から独立を保つためには、もっと彼らのようになることだと判断しました。

徳川將軍制度に対する激しい武力衝突の後、明治天皇は西洋式の軍事力の支援を受けて日本の統治権を掌握しました。その結果、將軍の権威の下に存在していた、武装した侍を従える20余の領国（大名制度）は消滅しました。かつての侍たちは、もはや武器（刀）を帯びることを許されなくなりました。

しかし、侍の忠誠心という精神は、日本人の思考の中に生き続けました。そのことは、1950年にここ大阪・日本で活躍した、ある日本人キリスト教指導者の姿の中にも見られました。

もしイエス様があなたの主であるならあなたは神様の侍です

私がOICで行った前回の説教「忠実さの遺産 パート2」において、私は1941年12月7日、真珠湾攻撃を指揮した人物、淵田美津雄が残した遺産について語りました。日本の軍隊には、淵田の生涯にも見られるように、古代の侍の精神に基づく多くの理想がありました。

戦後、淵田は妻の実家が所有する土地で農業を始めました。彼は非常に熱心に働きましたが、飛行士としての経験しかなかったため、農業についてはほとんど知識がなく、農業入門書のような本を購入して学ばなければなりませんでした。彼は貫き通しました。

やがて成果が現れるようになると、彼は1つの真理に気づきました。彼はこう考えたのです。

「自分は働いた。しかし、作物を育て、良い食べ物として実らせるためには、別の力が必要だった。その背後には創造主なる神様がおられるはずだ。」

多くの日本人は、「自然」や「宇宙」を神として拝んでいます。淵田の鋭い思考力は、作物を成長させることに関して、農夫としての自分がいかに無力であるかを悟らせました。彼は、自然の中に神様の御手を見いだしたのです。

農業生活は彼に考える時間を与え、同時に、キリスト教の聖書からも、さらに多くの真理を見いだすようになりました。

彼の自伝『God's Samurai 神様の侍 (FLSB)』によると、戦後、彼は今後行われる戦争犯罪裁判に関する書類に署名するため、東京に滞在していました。そのとき、街中で1人の伝道者と出会い、小冊子（トラクト）を手渡され、後に聖書を購入しました。

農村にある静かな自宅で、彼は多くのことを思い巡らせました。「国家同士の戦争など、なんと愚かなことだろう。私と共に飛行を学んだ親しい仲間は、皆死んでしまった。日本兵もアメリカ兵も何百万人と命を失い、さらに多くの日本の一般市民も亡くなつた。私は、自分が乗っていた航空母艦に体当たりして命を捧げようとするアメリカ兵たちの勇気に、尊敬の念を抱くようになった。本当は、その勇気ゆえに彼らと友になりたいと思った。しかし、私は彼らを殺さなければならなかつたのだ。」

聖書を読み、黙想する中で、彼はそこにこそ真の答えがあると信じるようになりました。その答えは、神様の御子であるイエス・キリストを指し示していました。彼は、十字架において自分の罪のために受けるべき罰を引き受けてくださった方として、イエス様を自分個人の救い主として受け入れました。淵田は、イエス様の生涯とその死について読みました。幼子として来られたイエス様が神様の御子であること、そして成長されたイエス様が、自分自身の罪のためのいけにえであることを受け入れました。

Jake DeShazzerは、東京におけるキリスト教伝道の指導者でした。彼は淵田と出会った後、淵田に公の場で語るように励ました。DeShazzerは、淵田が語れば、多くの人々が集まり、イエス・キリストの福音に耳を傾けるようになることをよく理解していました。

前回の私のメッセージからの引用

「実際のところ、最初、淵田はイエス様について公に伝道することにためらいを感じていました。彼にトラクトを手渡し、その後、彼を救った聖書を売った Jake DeShazzer を含む東京から来ていた牧師たちは、淵田に自分の信仰で新しく生まれ変わった人生を秘密にしておくべきではないと強く勧めました。宗教的なことを秘密にするのは、日本人に非常に多い習慣です。」

しかし、1950年4月14日、彼らは大阪で淵田の初めての公の証しの場を開き、多くの人々が集まりました。真珠湾攻撃を指揮した男の話を聞こうと、開かれた街頭の広場には群衆が押し寄せました。

淵田の頑なな抵抗ぶりを見て、牧師チームの1人である金一が彼に言いました。

『キリストはこう言われています。「あなたが人々の前でわたしを恥じるなら、わたしもあなたを天におられる父の前で恥じるであろう」と。真の侍は、主人に搖るぎない忠誠を貫きます。もし今、キリストがあなたの主であるなら、キリストはあなたを彼の家来としています。あなたの人生は、今や彼のものです。』』

金一は、名誉ある侍の忠誠心を巧みに用いて、戦時中のパイロットであり、現在は新しく生まれ変わったクリスチャンである淵田に、イエス様のために証しを語るよう説得しました。

やがて、淵田は聴衆に向かって非常に説得力のある語りをするようになりました。彼は、日本の捕虜収容所で拷問を受けながらも後に日本人を救うために戻ってきた、アメリカ人クリスチャン兵士たち Jake DeShazzar や他の人々の愛について力強く語りました。

また、日本軍によって斬首された殉教者クリスチャン宣教師の娘の驚くべき愛について語りました。彼女は健康に回復するために日本の捕虜兵士たちを看護していました。

そして、御子イエス様への信仰によって彼を救われた神様を語りました。この信仰こそ日本人が求める和（調和）への唯一の道であると彼は言いました。やがて、彼はアメリカで Billy Graham と共に伝道者として活動するようになりました。多くのアメリカ人からの憎しみに直面しながらも、彼は神様の侍である真実にあり続けました。

輝かしい幼子、悲しい戦争、神様の救いの贈り物

淵田がイエス様を救い主・主として受け入れる道を歩んだことを考えるとき、私は聖書のローマ人への手紙の次の箇所を思い起します。

＜ローマ人への手紙 11 章 33 節 - 34 節＞

33 ああ、なんとすばらしい神を、私たちは信じていることでしょう。その知恵と知識と富は、なんと豊かなことでしょう。神のなされる方法を理解することなど、とうていできません。
34 いったいだれが、主のお心を知ることができますか。だれが、主のご計画の相談に加わるほど の知識を持っていますか。

淵田がイエス様を信じるに至る道には、死や破壊、悲劇、そして彼を生かす奇跡が含まれていました。今日、私たちはイエス様の誕生に喜びを感じています。しかし、喜びの道であれ、悲しみの道であれ、神様は私たち1人ひとりを導いておられます。神様の望みは、私たちが御子イエス様という贈り物を受け取ることです。クリスマスに与えられる、最も素晴らしい、永遠に続く贈り物です。

多くのクリスチャンは、淵田のように心を整え神様の贈り物であるイエス様を受け入れるために、これほど困難な人生を歩む必要はありませんでした。しかし、この選択は＜ローマ人への手紙 11 章 33 節 - 34 節＞で神様の知恵であると言っています。

＜ローマ人への手紙 11 章 33 節 - 34 節＞

33 ああ、なんとすばらしい神を、私たちは信じていることでしょう。その知恵と知識と富は、なんと豊かなことでしょう。神のなされる方法を理解することなど、とうていできません。
34 いったいだれが、主のお心を知ることができますか。だれが、主のご計画の相談に加わるほど の知識を持っていますか。

悔い改めと救い

イエス様という贈り物を信じるためには、まず私たち全員が悔い改めの贈り物を受け取る必要があります。淵田は、傷ついた戦士、まさに「傷ついた虎」でした。戦争英雄としての名声と栄光の後、農夫として謙虚に生きる姿は、神様が淵田の心を開き、罪を悔い改めさせるための神様の知恵の働きでした。淵田を救ったクリスチヤンの聖書は、私たちに次のことを教えています。

＜ルカの福音書 24 章 46 節 - 47 節＞

46 イエスは、さらに続けられました。「キリストは苦しめられ、殺され、そして三日目に復活することが、ずっと昔から記されていたのです。

47 悔い改めてわたしのもとに立ち返る人は、だれでも罪が赦されます。この救いの知らせは、エルサレムから始まり、世界中に伝えられるのです。

私たち伝道者は、イエス様が全世界の救い主であるという良い知らせを宣べ伝えます。しかし同時に、悔い改めなければ罪の赦しはないということも宣べ伝えなければなりません。これは、イエス様がエルサレムで説かれた＜ルカの福音書 13 章 3 節＞の教えに示されています。

＜ルカの福音書 13 章 3 節＞

それは違います。あなたがたも、悔い改めて神に立ち返らなければ、同じように滅びるのです。

イエス様は、私たち伝道者に、ご自身の誕生、十字架の死、復活だけでなく、罪の赦しのための悔い改めも、イエス様の御名によって全ての国々に宣べ伝えるよう命じられました。イエス様は＜ルカの福音書 24 章＞で言わされました。

したがって、イエス様のもとに来るすべての罪人は、まず自分の罪深い生活を神様に認め、悔い改める、あるいは神様のもとに向かって立ち返ろうと選ぶ必要があります。

そのうえで初めて、イエス様を、そしてイエス様の御名を信じることができます。

このメッセージの冒頭で引用した＜ヨハネの福音書 1 章 12 節＞を思い出してください。

＜ヨハネの福音書 1 章 12 節＞

(11) ・ 12 ご自分の国に来ながら、ご自分の民に受け入れられなかつたのです。この方を心から喜び迎えたのは、ほんのわずかな人たちだけでしたが、受け入れた人はみな、この方から神の子どもとなる特権をいただきました。それにはただ、この方が救ってくださると信じればよかつたのです。

神様は、イエス様の御名を信じる者すべてに、私たちが宣べ伝える福音を信じるようにされるのです。

クリスマスの光や歌による楽しい気持ちは、やがて消えてしまうでしょう。しかし、罪の悔い改めとイエス様への信仰は永遠に続きます。1950 年、淵田が大阪の人々に伝えたメッセージには、次のような言葉が含まれていたことを思い出してください。

「この【キリスト教の】信仰こそ、日本人が求める和（調和）への唯一の道である」と、彼は言いました。

今日では、中国から世界中に戦争への恐怖が伝わり、平和ではなく緊張が広がっています。私たちは、淵田の伝えた福音のメッセージが求める和（調和）は、日本だけでなく、全世界の人々に向けられたものであることに気づかされます。

そして、このメッセージの冒頭で触れたことを思い出してください。

使徒パウロは<コリント人への手紙 I 15章3節 - 4節>にこう書きました。

<コリント人への手紙 I 15章3節 - 4節>

3 まず私は最も大切なこととして、かつて自分も知らされた、次のことを伝えました。すなわち、

キリストは、聖書に記されているとおり、私たちの罪のために死なれ、

4 葬られたこと、そして預言者たちの語ったとおりに、三日目に復活されたことです。

もしこのクリスマス・イブに、悔い改めの心を持ち、次の3つのことを信じるなら：

- キリストがあなたの罪のために死んだこと
- キリストが葬られたこと
- キリストが墓からよみがえられたこと

そうすれば、明日から新しい誕生日を祝うことができるでしょう。

それは、あなた自身の誕生日です！

あなたの靈的な誕生日は、今夜、クリスマス・イブに訪れるのです。

イエス様への喜びは、ただの歌以上のものとなり、永遠に続きます！

祈りましょう！